

平成 27 年度

行政政策学類

編入学・学士入学試験

小 論 文

時 間 90 分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子はこの表紙を除いて 8 枚、解答用紙は / 枚です。
印刷不鮮明の箇所などがあれば、監督者に申し出て下さい。
3. 解答用紙の指定欄には、必ず受験番号を記入して下さい。
4. 解答は、別紙の解答用紙の解答欄に横書きで記入して下さい。
5. 解答用紙は持ち帰らないで下さい。なお、問題冊子と下書き用紙は持ち帰って
構いません。

【問題】

次の資料は、伊藤和明『津波防災を考える——「稲むらの火」が語るもの』（岩波書店、2005年）の一節である。これを読んで、以下の設問に答えなさい。

問1 この資料の中で扱われている文章には、1937年から1947年にかけて使用された小学校用の国定教科書の教材が含まれている。この資料から現在の災害対策についてどのような教訓を引き出せると考えますか。300字以内で述べなさい。

問2 日本海中部地震が1983年、北海道南西沖地震が1993年、スマトラ沖地震が2004年、東日本大震災が2011年、これらはいずれも津波によって大きな被害が発生している。「津波は忘れないうちにやってくる」というのが実情である。これだけ大きな被害を出しておきながら、なぜ対策が追いつかないのが、その原因について、あなたが考えるところを300字以内で述べなさい。

問3 日本では、津波のほか、地震・雷・竜巻・台風・土石流・噴火など様々な災害が発生する。これらの災害に対する対策につき、あなたが、国・地方公共団体または福祉施設・一般企業などの民間団体において、災害対策の部署にいたとすれば、どのような対策を考えるかを600字以内で具体的に論じなさい。なお、どの種類の災害についての対策をとりあげたのかを明記しなさい。

見直された「稲むらの火」

「あの教材が残っていたなら」

一九八三年五月二六日の正午直前に発生した日本海中部地震(M7.7)は、青森・秋田両県を中心に大きな被害をもたらしたが、わけても沿岸各地を襲った大津波による災害は甚大なものであった。死者一〇四人のうち一〇〇人が、津波による犠牲者だったのである。

よく晴れた日の昼間だったため、海岸に出ていた行楽客や磯釣りの人も津波に吞まれ、能代港では、護岸工事をしていた作業員三五人が犠牲になった。

なかでも人びとの涙をさそったのは、男鹿半島の加茂青砂海岸へ遠足に来ていた小学生一三人が、津波により幼いのちを失ったことである。海からは遠い秋田県の内陸部にある合川南小学校の四、五年生であった。生徒四五人と引率の先生二人が、二台のマイクロバスに分乗して目的地に近づいたころ、強い地震の揺れにあった。しかし海岸に着いたときには、地震は治まっていたし、海は何ごともしなかったかのように静まりかえっていた。

先生も子どもたちも、みな浜へ下りて昼食の弁当をひろげはじめた。そのとき、海面がとつぜん盛りあがるようにして津波が襲ってきた。地震発生から七、八分後のことであった。一瞬のう

ちに海へ流された子どもたちや先生を、地元の漁民が船を出して懸命に助け上げたのだが、一三人はついに帰らなかったのである。

この悲しい出来事のと、「海岸で強い地震にあったなら、まず津波を警戒するのが当然ではないか」と指摘する声が聞かれた。それとともに、「もし「あの教材」が今も教科書に残っていたなら、この悲劇は防げたかもしれないの」という声が上がった。

ここにいう「あの教材」こそ、戦時中から戦後にかけて使われていた国定教科書の尋常小学校五年生用「小学国語読本巻十」と、その後の六年生用「初等科国語六」に載っていた「稲むらの火」だったのである。



第四期国定教科書「小学国語読本巻十」

感動的だった「稲むらの火」

「稲むらの火」の筋書きは、次の通りである。ある海辺の村の高台に住む荘屋の老人が、気味の悪い地震の揺れを感じたあと、海水が沖へ向かって引いていくのを見て、津波の襲来を予感した。そこで彼は自宅の田圃に積んであった稲むら(刈り取ったばかりの稲の束)に松明で火を放って、荘屋の家

が火事だと思わせ、村人全員を高台に集め、津波から救ったという物語で、当時の子どもたちの心を強く与えた作品であった。

以下に、その原文を載せる。(漢字は、常用漢字に改めた。仮名づかいは、原文のまま)

「これは、たゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に烈しいといふ程のものではなかった。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない無気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度^{しよ}に心を取られて、さつき^{さつき}の地震には一向気がつかないもの^{もの}のやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、忽ち^{たちまち}そこに吸附^たけられてしまった。風とは反対に波が沖へくくと動いて、見るく海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れて来た。

「大変だ。津波がやつて来るに違ひない。」と、五兵衛は思った。此のまゝにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみにやられてしまふ。もう一刻も猶^{なほ}予^よは出来ない。

「よし。」

と叫んで、家^{いへ}にかけ込んだ五兵衛は、大きな松明^{しょうめい}を持つて飛出して来た。そこには、取入れ

るばかりになつてゐるたぐさんの稲束^{いなむら}が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」

と、五兵衛は、いきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ又一つ、五兵衛は夢中で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つたまゝ沖の方を眺めてゐた。

日はすでに没して、あたりがだんく薄暗くなつて来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。庄屋さんの家だ。」と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。続いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高台から見下してゐる五兵衛の目には、それが蠖^{くわ}の歩みのやうに、もどかしく思はれた。やつと二十人程の若者が、かけ上つて来た。彼等は、すぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大声に言った。

「うつつちやつておけ。——大変だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人は、追々集つて来た。五兵衛は、後から後から上つて来る老幼男女を一人々々数へた。集つて来た人々は、もえてゐる稲むらと五兵衛の顔とを、代るく見くらべた。

其の時、五兵衛は力一ばいの声で叫んだ。

「見る。やつて来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見つめた。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見る／＼太くなつた。広くなつた。非常な速さで押寄せて来た。

「津波だ。」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、山がのしかつて来たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとどろきとを以て、陸にぶつかつた。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。雲のやうに山手へ突進して来た水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分等の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高台では、しばらく何の話し声もなかつた。一同は、波にめぐり取られてあとかたもなくなつた村を、たゞあきれて見下してゐた。

稲むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと気がつくくと、無言のまま五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

当時これを学んだ人の多くが、他の教材については忘れていても、「稲むらの火」だけは鮮明に覚えているという。私自身も例外ではない。時局を反映して、軍国調の教材がほとんどを占めていたなかで、この物語だけはきわめて印象的であり、子どもたちの心に深い感銘を与えたのである。

「稲むらの火」が国定教科書の国語教材として使われていたのは、一九三七年から戦後まもない一九四七年三月までの一〇年間であった。その後、検定教科書の時代になつても、一部の教科書に多少の修正を加えて採録されていたが、国語の教材としては、一九六〇年代に姿を消している。

安政南海地震と濱口儀兵衛

これほど多くの感動を呼んだ「稲むらの火」の物語は、けつして作り話ではない。そのモデルとなつた実話が存在しているのである。それは江戸時代の末期、一八五四年(安政元年)に起きた安政南海地震のさい、紀州和歌山藩広村現在の和歌山県川町で実際にあつた話がもとになつてゐる。

この年の一月二三日と二四日(旧暦一月四日、五日)、南海トラフを震源とする安政東海地震(M8.4)と安政南海地震(M8.4)という二つの海溝型巨大地震が、三二時間の間隔をおいて相次いで発生し、関東から東海、近畿、四国、九州にまで、広範囲にわたる震害と津波災害をもた



濱口儀兵衛(梧陵)
(提供=(株)ヤマサ醤油)

らした。

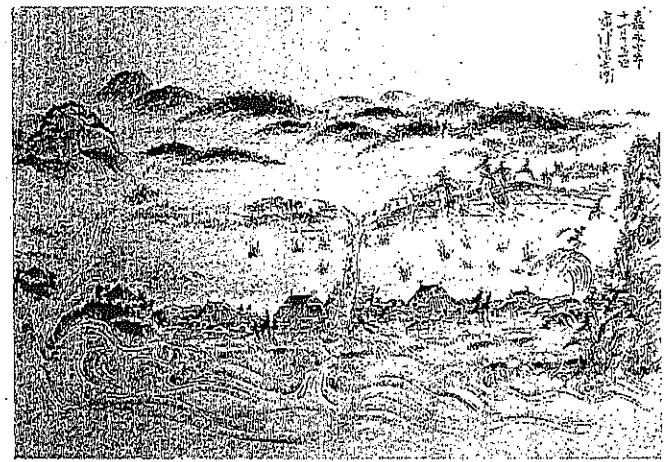
広村は紀伊半島の西海岸にあるため、二日目の南海地震による津波の被害が大きかった。家屋三九九戸のうち一二五戸が流失し、三六人の死者がでたという。

当時この広村に、濱口儀兵衛という人物がいた。彼は、下総(現・千葉県)の銚子で醤油の製

造業を営んでいたのだが、この年は故郷の広村で過ごしていたという。当時三四歳だった儀兵衛は、名家の主人としてなにかと村人の面倒を見、自分を犠牲にしてまで村のためにつくしていたので、村人からたいへん慕われる存在であった。

儀兵衛の手記によれば、前日の朝、安政東海地震が起きたとき、「大地震のあとには津波のくることがある」と伝え聞いていた彼は、老人や女性、子どもたちを高台に避難させた。また、若者たちに村内の見まわりを命じ、火災や盗難への警戒にあたらせた。だがこの地震は、震源域がやや遠かったため、広村ではほとんど被害がなかった。

翌日の午後四時ごろ、安政南海地震が発生した。前日の地震よりも、揺れははるかに激しく、家々の瓦が飛び、壁が落ち、塀が倒れた。やがて、南西の方角から大砲のとどろくような音が聞こえ、大津波が襲来した。家も人も流され、津波の先端が川をさかのぼっていった。



広村を襲う安政南海地震津波(広川町養源寺蔵「広村津波図」, 1854年)

儀兵衛も、多くの村人とともに流されたのだが、

ようやく八幡神社のある小高い丘にすがりついて助かった。第一波が引いたあと、儀兵衛はまだ下の村に多くの人が残っていることを知り、若者たちに命じて、八幡神社の丘まで村人を避難誘導させようとした。だが日はすでに暮れて、あたりは真っ暗。そこで村人たちが方角を見失わないよう、道筋にあたる水田の稲むらに松明で次々と火をつけさせ、あたりを照らして避難路を確保してやったのである。

やがて第一波より高い第二波が襲ってきた。燃えていた稲むらが、大波によってかき消された。この夜、津波は四回にわたって村を洗ったという。しかし儀兵衛の機転によって、多くの村人がいのちを救われたのである。

その後、濱口儀兵衛は、村を将来の津波から守るために、莫大な私財を投じて大堤防の築造に着手した。四年の歳月をかけて完成した堤防は、高さ四・

五メートル、全長六五〇メートルに及ぶものであった。

こうして饑兵衛は、村人から「生き神様」として崇められるようになった。明治維新後は、県政そして国政へと活躍の場をひろげ、一八七一年(明治四年)には、大久保利通の推挙により、いわば郵政大臣にあたる駅通頭えきすうだうに任ぜられている。

彼の築造した大堤防は、その後、一九四六年一二月に起きた昭和の南海地震のさいに威力を発揮し、広村を大津波から守ったという。

いま広川町(かつての広村)を訪れてみると、大堤防の上に、濱口梧陵(饑兵衛が後に称した号)の遺徳をたたえる「感恩碑」が建てられている。

ラフカディオ・ハーン(A Living God)

いうまでもなく、教材「稻むらの火」の五兵衛のモデルは、この濱口饑兵衛である。ではそれが、どんな経緯で小学校の国語教科書に載ることになったのだろうか。

実はそこに、明治の小説家ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が介在しているのである。

一八九〇年(明治二三年)に来日したハーンは、松江中学や熊本の第五高等学校で教鞭をとったあと、一時は神戸クロニクル社で英字新聞の記者をしていた。日本女性セツと結婚し、のちに日本に帰化するほど、この国の風光や人情を愛していたハーンは、日本古来の文化や伝説に深い興味を抱いて、それを自身の作品に反映させていたことは、よく知られている。

ハーンは一八九五年一月に神戸クロニクル社を退社したが、引きつづき神戸に在住していた。

その間、東京帝国大学の講師に内定しており、九六年九月には講義を始めることになっていた。

その矢先の一八九六年(明治二九年)六月一日、三陸沿岸を大津波が襲い、二万二〇〇〇人の死者をだす大災害が発生した。いわゆる明治三陸地震津波である。

その悲惨なニュースは、日本を愛していたハーンの心に大きな衝撃を与えたにちがいない。そして津波から六日後、六月二一日付けの大阪毎日新聞に、かつての安政南海地震のさい、紀州広村で、濱口饑兵衛が機転をきかし、稻むらに火をつけさせて村人を救ったという記事が載る。日本の新聞が読めなかったハーンは、おそらく妻のセツから、この記事を読み聞かされたのではないだろうか。

こうして、明治三陸地震津波による大災害と、広村に伝わる濱口饑兵衛の美談とが、ハーンの脳裏で一体となって、彼はA Living God(生ける神)という表題の短編を書き上げ、一八九六年一月、米国の『大西洋評論』誌に発表したのである。

この短編のなかで、ハーンは「饑兵衛」を「五兵衛」と改め、湾を見下ろす高台に住む年老いた村の有力者としている。

ある秋の日の夕方、五兵衛は奇妙な地震を感じる。



ラフカディオ・ハーン
(小泉八雲)
(提供=小泉凡氏)

“It was not strong enough to frighten anybody” (それは、誰をも驚かすほどの強さではなかった) また “a long, slow, spongy motion” (長く、のびのびとゆるりとした揺れ方) だった。直後に五兵衛は、海がただならぬ様子になっていくと気づいた。“It was running away from the land” (海が陸から沖へ向かって走っていた) のである。

ここで五兵衛は、幼いころ祖父から伝え聞いていた教訓を思い起こす。孫の忠に松明を持ってござせ、家の財産である数百の稲むらに、次々と火を放つのである。孫は、祖父の気が狂ったと思う。燃えさがる火を見て、山寺では鐘を突きはじめた。異変に気づいた村人は、次々と高台へ駆けあがってくる。すべての村人が登りついたあと大津波が襲来した。三たび、五たびと津波は荒れ狂い、村落はすべて失われた。しかし、人びとのいのちは助かった。

五兵衛は静かに言った。“That was why I set fire to the rice” (あれが、稲に火をつけた訳なのだ)。

ハーンが A Living God は、一八五四年安政南海地震のときの広村とは、かなり異なる設定になっているのだが、この物語こそ、のちの教材「稲むらの火」の原形になったのである。

中井常蔵と「稲むらの火」

時代は下って一九三四年(昭和九年)、文部省は第四期国定教科書の制作にあたり、国語と修身の教材を全国に公募した。そのころ、和歌山県で小学校の教員をしていた一青年が、ハーンの A Living God をもとにして、教材用に書き改め、「燃ゆる稲むら」と題して応募したところ、見事に入選を果たし、三年後から「稲むらの火」として国定教科書に登場することになったのである。その青年教師の名は、中井常蔵^{なかい つねぞう} といった。

小学生二三人が津波の犠牲になった日本海中部地震から五年後の一九八八年、「稲むらの火」をテレビ番組で取り上げるため、私は生前の中井氏に面会する機会があった。中井氏は、広村の隣の湯浅町^{ゆあさ}に生まれ、かつて濱口儀兵衛が創立した広村の耐久^{たいきゅう}中学(創立当時は耐久舎)に入学、儀兵衛が築造した大堤防の上を歩いて、「二里半(六キロメートル)の道を五年間通いつづけたという。

長じて師範学校に入った彼は、英語の教材としてラフカディオ・ハーンを選集を学んだが、そのなかに A Living God があった。この短編に出あったとき、これこそ自分の故郷に語り伝えられているあの物語だと直感し、大きな感動を覚えたという。

やがて教壇に立つことになった彼は、ハーン短編に描かれた五兵衛の心を、何とか子どもたちに植えつきたいと願った。かねてから子どもたちに愛される教材、子ども心に何かを刻みつける教材を願っていた彼は、A Living God に出あったときの感動をそのまま伝えようと、「燃ゆる稲むら」と題して書き上げ応募したのだという。そしてその感動は、彼の願いどおり、教材を通じて全国の子どもの心をとらえ、当時学習した人びとには鮮烈な記憶として焼きついているのである。

振りかえってみれば、「稲むらの火」は、防災教育の不朽の名作だったといえよう。そこには、一年の収穫である稲むらを燃やしてまで、村人を救った五兵衛の物語を通して、人のいのちの尊さを教える防災の基本理念が盛りこまれている。また、海水の異常な動きから津波の襲来を予見した五兵衛の自然認識の確かさを通して、先人からの伝承がいかに大切なものであるかをも教えている。

さらに五兵衛の行動は、危険を予知したとき、速やかにその回避につとめる、いわば地域防災の責任者としての行動であって、現代に通じる危機管理のモデルともいえよう。災害多発国であるこの日本で、防災の理念を正面切って声高に叫ぶよりも、「稲むらの火」のような感動的な物語を通して、人の心を打つ教育、情緒や情感に訴えかける教育のほうが、はるかに勝っているように思えてならないのである。

平成27年度入学試験 小論文「出題意図」
(入試情報公開用)

行政政策学類 編入学及び学士入学

伊藤和明『津波防災を考える 「稲むらの火」が語るもの』(岩波書店、2005年)の一節を素材として、災害対策について考えさせる問題とした。なお、この本のなかにかつての国定教科書の国語教材が引用されている。

問1 この資料から現在の災害対策につき何を教訓として引き出せるかを問う設問であるが、長文の文章読解力と文章表現力が問われることになる。

問2 「津波は忘れないうちにやってくる」ということの原因を考えさせる問題である。これだけ被害が繰り返されると天災ですますることができない。その原因の追求といった論理的思考が求められる。

問3 津波に限定せずに、災害対策について論じさせる問題である。現在、国とか地方自治体のみならず、福祉施設とか一般企業でも防災マニュアルを策定している。ここでは一市民として抽象的に災害対策を論ずるのではなく、将来、就職したときのことにも念頭において、災害対策を考える部署という立場から記述させることにした。そのために抽象的な対策ではなく、具体的な説得力のある記述が求められることになる。社会的な関心の高さ、問題を発見する力、論点を適切に構成していく力、文章表現力などが要求される。